



校長 坂本 晋

# みたけが原便り

## 第15回 「鰯と鯰の話」

(7月終業式講話より)

梅雨寒が続いていますが、三者面談も終わりのよいよ明日から夏休みです。1学期の終業式を今日も沢山の賞状伝達で締めくくることができてうれしく思います。「水の作文コンクール」は見事に学校賞、本校全体のレベルの高さを示しました。素晴らしいことですね。

さてコロナで始まった今年度でしたが、疾風怒濤の4ヶ月が過ぎました。ここまでを振り返っての皆さんの感想はいかがか。春先からマスクを着用し、三密を避け、時差登下校をするなど何かと行動の自由が制限される日々でした。最近では「新しい生活様式」という言葉がよく言われます。これは今までの当たり前を見直し、新しいスタイルと価値観で暮らしましょうという提案です。

そうした中で、わたしは「新しい生活に大切なことって何だろう?」「人間の進歩って何だろう?」そんなことを考えていました。

そこで、今日は皆さんに何を話そうかなと思ったんですが、候補が二つあります。

一つは昆虫の話、もう一つは魚の話なのですが、迷ったのでここは皆さんに決めてもらおうと思います。真剣に悩むような問題ではありませんので、皆さんの今日の気分で決めましょう。手を上げて下さい。ムシか?サカナか?

はい。それでは挙手が多かったサカナの話をしてしましょう。

さて、最近の皆さんの様子を見てみると、これもコロナウィルスの影響の一つかなと感じることがあります。

コロナによる制限や制約の多い自粛生活のストレスのせいかもしれませんが、目に見えな

いフラストレーションが溜まって心身のバランスを崩してしまう。自分で自分をコントロールするという、これまで普通にしていたことがうまく出来ない。そのせいでイライラして何かにあたりたり、つい言動が荒っぽくなってしまおう。友だちとぶつかってしまっ、自分でもこれはちょっとまずいなと感じた人もいのではないかと思います。

たとえば、朝登校して「おはよう」と大きな声で挨拶する。友だちとは顔を寄せて笑ったり話したりする。ものを貸したり借りたり。机を寄せてお喋りしながらお弁当を食べる。嬉しい時や楽しい時は相手の手を取ったり肩を叩いたりする。みんな自然な行為・動作です。

これまではことさらに考えなくても良かったこと当たり前だったことに、コロナウィルスによる「新しい日常」は疑問を投げかけ、場合によっては180度の転換を強います。混乱するのも当然ですね。

これまでの常識が揺さぶられることで、これまで気づかなかった友だちと自分との考え方や感じ方、受け止め方の違いが浮き彫りになって、自分はこれでいいのかしらと不安に思ったり悩んだりする人も少なくありません。コロナ禍は図らずも自分と他者とは違うんだということハッキリと示します。

そこで、今日はこんな話を紹介します。科学的に証明されているかどうかは未確認ですが、「イワシ」の話です。

みなさん、魚の「イワシ」は知ってますよね?イワシを食べるのは好き?塩焼きや煮付け。小骨が多くてちょっと苦手という人も?開いてフライにしたりショウガ醤油に漬けて蒲焼きにするのも美味しい。

漢字で書ける人？(殆どの魚は漢字で書くとサカナ偏がついた会意文字です。)はい「魚偏」に「弱い」と書きます。いま手を挙げた人は漢字検定2級に合格です。

さて、その名のごとく「イワシ」(の語源は実は「ヨワシ」から来ているという説もあります。弱いので集団を組みます。)は非常に繊細で生きたまま運搬するのが難しい。運んでくる途中で弱ってみんな死んでしまう。でも魚は鮮度が命です。ここが悩ましいところなのですが、ところがノルウェー沖で捕獲したイワシの群れを入れた巨大な生け簀の中に、たとえばナマズを1匹紛れ込ませる。するとなんと、イワシの群れは生け簀ごと船で海中を運ばれて、皆ピンピン元気なまま日本に到着するんだそうです。

それはなぜか？一説によると、生け簀の中に、ナマズという「異質」なものがある効果ではないかと考えられます。異質なものが近くにいるだけで生物は多いなる刺激を受ける。適度な緊張感といってもよい。そのため、普通は長距離を輸送すると伸びてしまうイワシも無事長旅を乗り切ることができるという理屈のようです。

真偽のほどは定かではありませんが、これは人間にも当てはまるのではないかと思います。人はみんなそれぞれ違っていています。違って当然。異質なもの同士だからこそ、互いに自分にはないものを学び合い、それを糧に成長していける。だから、自分とは違うものを排除したり、「普通」とは違うことを毛嫌いしたりせずに、(そもそも「普通」という概念が人それぞれですよ。朝食にパンを食べるのが普通の人、お粥を食べるのが普通の人、います。ですから「普通」ではないと反発したり)、逆に自分は他の人と違うみたいだと卑屈になったりせずに、お互いの優れたところを素直に「スゴイ！」と認め合いながら切磋琢磨していければ良いと思います。

国や社会、会社といった組織にとっては、異質なものの存在、多様性こそが進歩と発展の原動力になります。学校やクラスといった共同体でも、そういう力学は働きます。むしろ、気の合う仲間内でイワシのように群れて満足しているようでは成長はおぼつかない。いつもいつも「ソウダネ!」「同じだね!」「一緒だね!」というやり取りばかりでは新しい発見はありません。ましてや、手をつないで一緒にトイレに行くのが友だちだとは思えませんね。別な目で見れば、ナマズの孤独を恐れてはいけないのだと思います。仲間より一足先に大人への階段を上り始める人は、「自分はひとりなんだ!」と自覚するところから第一歩を踏み出します。

違いを意識し、その上で謙虚に相手の思いや言葉に耳を傾け、異なる意見も「フーンそうなのか!」とまずはいったん受け止める。そこから相互理解の輪は広がっていきます。すると、お互いを隔てる垣根が低くなって、のびやかに拓けた広い世界が見えてきます。遠くの方も見えてきます。

コロナウィルスのために、皆で集まって一緒に何かをすることが出来ない、大切な人や好きな人ほど少し距離を置かなければならない、そういう時代です。だからこそ、まずは私たちが、「こうでなければねばならぬ」という固い窓枠を外し、心の換気を心がけることで、いっそう風通しの良い涼やかな附中にしていきたいと思います。

よい夏休みを。